

令和6年度 愛知県立岡崎盲学校いじめ防止の取組評価について（報告）

1 取組内容と方法

(1) 学校評価の項目に、いじめに関する取組目標を立て、実施する。

- ・「いじめ不登校等対策委員会」を設置し、事案の解明と解決に向けての主導的な立場をとる。
- ・委員会を中心に、情報の伝達・共有を迅速に適切に行えるよう意識的に対応する。

(2) 学級ごとに、いじめ防止の観点で取組目標を設定し、実施する。学級経営案にも明記する。

(3) 生活アンケートを年間で3回実施し、児童生徒の状態の把握に努め、必要に応じて指導に反映できるようにする。

- ・原則として「小学部」「中学部」「高等部普通科」「高等部保健医療科、専攻科医療科」の4種類のアンケートで行い幼稚部及び各部の重複障害学級は幼児児童生徒の実態を踏まえて行う。
- ・アンケートの記載内容については、必要に応じて適切な対応を行う。

2 取組評価の方法

(1) 職員対象アンケートの集計や記載内容から評価をする。

- ・記載内容から取組に対する理解度や満足度を考察し、文章表記で表す。

(2) 学級ごとの取組目標に対する反省をもとに評価をする。

- ・学級経営案の記載事項や担任に対する聴取から、学部の傾向や全校の傾向を考察し、文章表記で表す。

(3) 生活アンケートの集計や記載内容から評価をする。

- ・計上される数や記載内容から、全体の傾向を読み取り、文章表記で表す。

3 評価

(1) 職員アンケートから

いじめ防止の観点から、「児童生徒の様子は特に問題ない」とする回答となった。

生活アンケートの質問項目に関して、「やりがいの項目で中学部の生徒の自己評価があまり高くないため、上がるような支援をしたい。」という意見があった。発達段階的にも思春期に入り、自意識と客観的事実との違いに悩んだり様々な場面で葛藤したりと思春期特有の課題が現れる時期である。日常生活から幼児児童生徒の実態に応じて、寄り添った指導を心がけることができた。

(2) 学級の取組評価から

「場面に合った挨拶」や「友達を意識した言動」、「他者理解」などをテーマに発達段階に応じた目標設定をし、いじめ防止に取り組むことができた。幼小小学部では、友達との活動場面において、教師が間に入って一緒に遊んだりロールプレイをしたりすることで友達の気持ちを考えた言動ができるようになってきた。中学部や高等部では、日常生活の様々な場面において、自分と他者との考え方の違いを認めたり、互いの個性を尊重したりすることを意識してコミュニケーションを取ることができた。

(3) 生活アンケートから

【小学部】

アンケート結果から友達同士でのトラブルは多少あったが、その中の多くは施設で起こったことがきっかけとなり、学校で発展しているものであった。そのため、施設での児童の様子を把握する必要がある。また、「気持ちかもやもやする」などの回答もあるため、日頃から担任が児童に話を聞くように努めた。

【中学部】

年間を通して学校における生徒間のトラブルは見られなかったが、施設でトラブルがあったことが確認された。聞き取りの結果、物を取られたり、暴言を吐かれたりしたことがきっかけとなっていたことが分かった。そのため、施設での生徒の様子や児童生徒間の関係についても把握する必要がある。「学校でやりがいを感じる場面はあるか。」という設問に対して、「ある」と答えた生徒の人数が増加していた。

【普通科】

年間を通して問題となる回答は無かった。「友達の接し方に悩む。」と回答した生徒がいたが、担任の観察・聞き取りから周りの生徒と上手くやれていると判断し、観察を継続している。「悩みを相談しない」と答えた生徒もいたが担任の聞き取りの中で、「現在は悩みがないため、必要になれば周りに相談する。」との話を本人から得た。

【保専】

年間を通して問題のある回答はなかった。「悩みを相談できる人がいない」と回答する生徒がいたが、聞き取りを行った結果、「相談はせず、自身で解決できている。」という回答であった。他の生徒にも気持ちに浮き沈みのある生徒はいるが、教師が話を聞いたり友達に相談したりすることができていた。